

【論文】

歴史系博物館における子どもの学びの評価： 事前・事後調査を中心に

Evaluation of children's learning in history museums:
the role of pre-visit and post-visit surveys

井上 由佳*

Yuka INOUE

Abstract:

Many Japanese museums have recently introduced educational activities. That is largely due to the introduction of various educational activities, evaluation methods and practices from overseas museums. Since 2000, several studies on Japanese museums have reported their educational programs and evaluations. However, most evaluation studies focus on science museums. They aim to show how museum visitors learn scientific knowledge through exhibitions. Although the number of history museums is the largest among Japanese museums, very few studies deal with learning in history museums. The few studies on history museums include Ichiba (1999) and Takeuchi (2004).

Among evaluation methods employed in visitor studies, I examine pre-visit and post-visit surveys in detail. Taking examples of pre-visit and post-visit surveys, I discuss the advantage as well as the disadvantage of this evaluation method. I also explore its relevance to the evaluation of children's learning in museums.

Then this study investigates children's learning at the National Museum of Japanese History (Chiba, Japan). I utilize the pre-visit and post-visit questionnaire surveys, in order to address the three research questions. How did museum experience affect children's perceptions of history museums? How did museum experience affect children's motivation for visiting history museums? How did museum experience affect children's interest in

* 国立歴史民俗博物館

Japanese history? Both the pre-visit and post-visit questionnaires were filled in by 83 elementary school pupils who visited the museum in early June, 2005. After presenting the key findings from the questionnaires, I answer the research questions. Finally I make suggestions on how to improve pre-visit and post-visit surveys in museum context.

1 はじめに

本稿は、歴史系博物館における子どもの学びを評価するために用いられる調査手法の一つとして、事前調査・事後調査の有効性を検討する。本稿はまず第2節で、博物館における学びに着目した来館者調査が近年増えていることを示す。そして、的確に来館者の声を引き出すためには、少なくとも大人と子どもとを区別して調査することが重要だと指摘する。また、歴史系博物館を訪問する前と後の子どもの学びの内容を調査する研究はまだ少ないことを指摘する。

本稿第3節では、歴史系博物館での子どもの学びを評価する際には、一過性の知識の増減ではなく、子どもの「博物館に対する捉え方、理解」、「博物館で学ぶことへの意欲」、「歴史学習への興味・関心」などを調べることが重要であることを明らかにする。と同時に、博物館訪問前と訪問後とに調査を行う必要性を示す。第4節では、事前・事後調査とはいかかる調査手法であるのかその特徴を述べ、先行事例に見られる事前調査および事後調査を取り上げ、それぞれの意義を明らかにする。それを受け第5節では、事前・事後調査の問題点を検討する。事前・事後調査の問題点としては、具体的には、事前調査を一般の来館者に実施することが困難なこと、事前・事後調査は実験室内のように来館者全員を同じ条件の下に査定することができないこと、そして、事後調査の結果から博物館体験を通しての学びの成果だけを抽出することは難しいことを指摘する。その上で、こうした問題点を踏まえつつ、事前・事後調査で集められるデータを来館者一人一人の学びの実態、博物館体験を理解するためのデータとして見ることができることを論じる。

本稿第6節及び第7節では、歴史系博物館における子どもの学びを評価する上での事前・事後調査の有効性を具体的に明らかにするため、事例として2005年6月に国立歴史民俗博物館（以下、歴博とする。）で行った学校団体に対する事前・事後調査¹を取り挙げる。そして、歴博での博物館体験を通して、歴史系博物館に対する子どもたちの理解が、博物館利用前の「物がいろいろあるところ」という表面的な理解から、博物館利用後の「面白いところ」という主観的な側面を含んだイメージへと変化していることを明らかにする。また、歴博利用後に90%以上の子どもが歴博への再訪を希望しており、歴博で学ぶことに対して高い意欲を示していることを明らかにする。さらには、「体験する所をもっと増やして欲しい」、「黄色の分かりやすい説明をもっと色々な所においてください」といった歴博訪問後に子どもが挙げる歴博への要望に、子どもの学習意欲的一面を見てとれることを示す。さらには、歴博を利用した6年生の子どもの90%が歴博利用前の時点から歴史学習が好きだと回答していることを示す。そして、歴博利用前に歴史の学習が嫌いだと回答していた児童の多くが、歴博での博物館体験を通じて、自分でも歴博に再訪したいし、他の人にも薦めたいと回答するなど、歴史学習への興味・関心を高めているように見えることを明

らかにする。

本稿第6節及び第7節で事前・事後調査によって子どもの「博物館に対する捉え方、理解」、「博物館で学ぶことへの意欲」、「歴史学習への興味・関心」などを調べることができることを示した上で、最後の第8節で今後の展望を示す。本稿で取り上げた調査の分析結果が、いかに博物館の展示や教育プログラムの改善に結びつけられるのかを、具体的に述べる。歴博の事前・事後調査は質問紙によるアンケートであったが、今後検討されるべき事前・事後調査の手法として、博物館のスタッフが博物館訪問前後の学校の授業を観察したり、博物館訪問中の様子を観察することや、質問紙にドローイング（お絵かき）を取り入れることなどを提言する。

2 博物館における来館者調査の現状

近年、日本においても、博物館の活動を客観的に来館者の視点から評価することが頻繁に行われるようになってきている。欧米ではヴィジターズ・スタディーズ (Visitors Studies) と呼ばれる来館者調査が1970年代以降盛んに実施されるようになってきた。すなわち、来館者の博物館体験を博物館側が的確に把握することで、運営の方法や展示・教育プログラムの改善に役立てるようになってきた (Hein 1998)。こうした欧米の来館者調査の実態と手法が日本でも紹介され(三木 1999)、ここ5年ほどの間に、科学系博物館における子どもの学びを調査したもの(畠中・大辻 2002)や、動物園における親子のコミュニケーションを分析したもの(並木 2005)、歴史系博物館における観客の観覧行動（小中学生・高校生および大学生・大人・高齢者を分けて調査）と観客の記憶・理解（一般来館者と教育学部生、史学科学生を分けて集計）を調査したもの(竹内 2004)などが次々に発表されている。博物館の活動を来館者の学びという視点から改めて捉え直すことの重要性が注目されるようになってきたといえる。

このように数々の来館者調査が日本の博物館でも実施されるようになってきている。上に挙げた日本の来館者調査の事例からも分かるように、来館者調査においては、来館者を十把一絡げに扱うのではなく、少なくとも大人の来館者と子どもの来館者とを区別して取り扱うことを重視する傾向が見られる（ただし、竹内（2004）は、年代別の分析を行ってはいない）。なぜなら、大人と子どもでは持っている知識量・情報量が異なり、生活経験の長さも質も違うため、同じ展示を体験するとしても、博物館体験の質が異なることが容易に予想されるからである。また、子どもの言語表現力は大人ほど発達していないため、大人向けに作られた調査形式や質問によっては、子どもから適切な回答を得られず、子どもの博物館体験の質を捉えきれない恐れが高いからである (Inoue 2005)。逆に、子ども向けに作られた調査形式や質問によっては、大人の博物館体験の質を捉えきれない恐れが高い。本稿では、可能な限り大人と子どもの両方を視野に入れつつ議論を進めていくが、紙幅と議論の都合上、特に子どもを対象とした来館者調査を重点的に取り上げて論じていく。

本稿では、来館者調査の手法の一つとして、事前・事後調査に特に注目する。そして、事前・事後調査という手法が歴史系博物館における学びの評価のためにどこまで有効なのかを検討する。

これまで、歴史系博物館における歴史学習についての事例研究は多数あるものの、歴史系博物館における事前・事後調査の事例研究はまだ少ないように見える。歴史系博物館で事前・事後調査の両方を行っている研究は、管見によれば、一場郁夫(1999)『歴史発見！歴博活用のアイディア』が挙げられるぐらいである。しかも、一場氏の研究は、一つの小学校の1クラスを対象にした限定期的な調査であり、博物館が主体となって取り組んだものではない。また、上記の竹内(2004)の歴博における来館者研究や、佐々木・村井(2000)の東京江戸博物館における来館者研究は、どちらも展示評価を主たる目的としている。そのため、竹内(2004)の調査は博物館訪問中の調査と事後調査とからなり、佐々木・村井(2000)の調査は事後調査のみと、どちらも事前調査を行っていない。したがって、博物館を訪問する際にやってみたいと期待していた事柄や興味、関心の程度などは調査の対象外とされている。また、調査報告を読む限りでは、どちらの調査も子ども向けの質問は用意していないように見える。本稿では、第5節及び第6節で、子どもの学びの評価を主たる目的として、子どもを対象に事前・事後調査の両方を組織的に行った事例として、歴博で2005年6月に行われた調査を取り上げ、事前・事後調査の有効性を具体的に明らかにする。

歴史系博物館の展示は小学校・中学校・高等学校の歴史教育と密接に関わっており、今後もより一層の連携が望まれている(一場 1999; 久留島 2002)。そして、小学校の学習指導要領(1998年制定、2002年一部改正)では、「学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること」とされている。こうした背景からも、歴史系博物館における子どもの学びの実態を調査し、その調査結果を展示や教育プログラムの開発に出来る限りフィードバックしていくことが求められている。

3 博物館における子どもの学びを評価するとは

次に、本稿において子どもの学びの評価とは何を指しているのかを明らかにしておこう。一般的に学びや学習の評価をするといった際、子どもが獲得した知識の中身や量を把握することを目標とする場合が多い。たとえば、国立教育研究所(2004)『学習評価の工夫改善に関する調査研究』によれば、「目標に準拠した評価は、学習指導要領に示す目標に照らして児童生徒の学習の実現状況をとらえるものであり、児童生徒にとって自らの実現状況を確認し、学習課題を明確にする手がかりとなり、教師にとっては指導の工夫改善のための資料となる。」(p. 2) とある。そして、子どもの学習の「到達度」を評価する方法として、研究授業などをした後にアンケート調査を行う、話し合いをさせその結果を報告書にまとめるなど、子どもの学びの中身を事後に調査する例が見られる(ボーラン 2000; 国立教育政策研究所 2004)。しかしながら、本稿で着目する「学びの評価」は、学習到達度を測るための評価とは異なり、子どもが「歴史系博物館をどのように捉え、理解したのか」(博物館像・博物館へのイメージ)、「歴史系博物館で学ぶことへの意欲」、「歴史学習への興味・関心」の三点を把握することに限定する。この三点は国立教育研究所(2004)が「個人内評価」の項目として挙げている「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「知識・理解」(p. 2)

といった項目と一部重なっている。

では、なぜ子どもの学びの一部として博物館へのイメージや歴史系博物館で学ぶことへの意欲、歴史学習への興味・関心を評価することが重要なのだろうか。それは博物館を生涯にわたり継続的に利用し、学びの場として認識してもらうためには、一過性の知識の増減ではなく、博物館体験から生まれた博物館像や博物館へのイメージがプラスであったのか、マイナスであったのかが大きく影響すると思われるからである（一場 1999）。たとえば、もし博物館に行った子どもが「退屈でつまらないところ」というマイナスのイメージを抱いた場合、その後、自主的に博物館に足を運ぶことはほとんどないだろう。反対に、子どもが「楽しくて、面白い」というプラスのイメージを抱いた場合は、学校団体で見学した後に、家族に呼びかけて博物館を再訪することもある。先行研究では、子どもの頃の博物館体験が、その後、生涯にわたり博物館を訪問する際の動機付けになることが指摘されている（Falk and Dierking 1992）。こうした側面からも、子どもの博物館体験を調査することが求められているといえよう。

歴史系博物館をはじめとする博物館における子どもの学びを評価するには、博物館訪問の前と後に調査をする必要がある。なぜなら、子どもは大人と同じように、一人一人が異なる知識や体験・経験を持ち、その知識や経験を博物館に持ち込み、そこを出発点に学ぶと考えられるからである。ハイン（Hein 1998）やフーパー・グリーンヒル（Hooper-Greenhill 1999）は、博物館において人々は、既得の知識や経験と絶えず照らし合せながら学ぶと指摘している。これは子どもにも該当するだろう。例えば、イノウエ（Inoue 2002；2005）は、イギリスの子どもが博物館の日本展示を見学する前から、既に日本に関する知識や日本人への多様なイメージを持ち、そこを出発点に博物館での学びが起こることを実証的に示している。このように、博物館を訪問する前に子どもが抱く博物館のイメージや動機・意欲などを調査することは可能である。そして、そのデータを元に、子ども一人一人の回答が博物館訪問後にどのように変化をするのかを明らかにすることができるのである。

事前・事後調査によって博物館における子どもの学びを評価するという手法の特質をより一層浮き彫りにするために、博物館における学びを評価する別の手法と比較しておこう。小谷・野上（1998）は、神戸市立青少年科学館において、来館者の動線調査を行っている。この動線調査の狙いは、小学生から大人までの「来館者が展示物とどのように関わることによって「学び」を構築しているのかを明らか」にするというものである（p. 211）。具体的には、「入場から退場までの来館者の動線」、「展示物の滞在時間」、「来館者の展示物に対する行動の有無」および「インストラクターの来館者への関わり状況」を明らかにしている。この調査は、展示を体験した来館者に、展示への感想や理解を尋ねるという意味での事後調査ではない。むしろ、博物館訪問中の調査と呼ぶべきであろう。そして、この調査は、人々の展示室内における行動を観察することにより、学びのプロセスを捉えることができるという考えに基づいている。

次節で事前・事後調査についてより詳しく論じる前に、博物館を通した子どもの学びを的確に捉えるために、博物館を訪問する前の地点で、子どもの学ぶ対象への知識や意欲、興味・関心を

把握することを必要とする根拠をもう一つ挙げたい。小学校の学習指導要領には「総合的学習の時間」で扱うことが望まれる課題の一つに「児童の興味・関心に基づく課題」が挙げられている。その実現のためには、博物館側も児童の「興味・関心」に注意を払うことが必要である。つまり、博物館を訪問する前の子どもの理解度や興味・関心から出発する展示や教育プログラムを開発し提供していくことが博物館には求められている。

4 事前・事後調査とは

事前・事後調査は、事前調査と事後調査の両方を合わせて行う場合には、来館者の既得の知識や経験を、博物館を見学する前の段階で予め調査しておく「事前調査」と、博物館を見学した後にもう一度、同じ来館者を対象に博物館体験から得られたものを尋ねる「事後調査」からなる。具体的な手法としては、アンケート調査の他にインタビュー（個別・グループ）や訪問調査などを考えられる。この調査方法の最大の利点は、同じ来館者の訪問前と後の回答を比較分析できる点である。そして、この方法の欠点は、予め来館する日が決められている学校などの団体でないと、「事前調査」を実施することが難しいという点である。予め来館する日の決まっていない一般的な来館者を対象に「事前調査」をするとすれば、展示室に入る前の段階で依頼することになる。その場合、展示を見る前と後にわざわざ調査に協力してくれる見学者をどうやって確保するかが問題になるであろう。

事前・事後調査は一般に、博物館における学びを評価するためというよりも、むしろ展示評価や展示の制作・改善のために用いられることの方が多い。例えば、米国のフランクリン研究所科学博物館館（Franklin Institute Science Museum）では、地球温暖化をテーマにした展示を制作する前に、一般の人々の理解度を調べるために事前調査を行った（Borun 2000）。そして、地球温暖化について一般に信じられている誤解を把握した上で、その誤解を解く工夫を凝らした展示を制作したという。また、米国の国立アメリカン・インディアン博物館（National Museum of American Indians）では、博物館の設置準備の段階に、一般の人々がアメリカン・インディアンに対して抱いている「イメージ」や誤解を調べるために事前調査を実施し、調査結果を展示制作に生かしたという（Doering, Digiacomo, and Pekarik 1999）。

事後調査を展示の改善のために生かした事例としては、「琵琶湖博物館を評価する」というワークショップがある。このワークショップでは、「1964年の農村の暮らし」という展示コーナーを取り上げ、米国で実践されている「制作途中評価」（Formative evaluation）を模擬的に実践した。「農村の暮らし」という展示の意図は、1964年当時の農村のくらしぶりを理解してもらうこと、とりわけ、水の有効利用が当時進められていたことを理解してもらうことであった（芦谷 2000 p. 27）。そして、10歳以上の来館者が展示体験後に、「水」「再利用」「リサイクル」という三つのキーワードに言及しながら展示内容を説明できるよう、展示を修正することを試みた。ここでは、来館者が展示から学んだ内容を見学後に尋ねて調べるという形での事後調査が実施された。そして、事後調査の結果、来館者に展示のメッセージが十分に伝わっていないことが判明した。調査

結果を踏まえた上で展示を修正し、さらにもう一度事後調査を行うことによって、展示の修正が有効であったかどうかを検証した。以上の琵琶湖博物館の事例は、展示改善という目的のために、博物館での学びを評価するための事後調査を行うという構造になっている。

5 事前・事後調査の問題点

次に、事前・事後調査の問題点を検討しておきたい。村田（2003）は、R. コーン（Randi Korn）による事前・事後調査のあり方への批判を紹介している。すなわち、「来館者が展示を訪れた前と後を比較することによって展示の効果を調べる」というこれらの方法は、展示を教訓的（didactic）に設計することを奨励し、その結果来館者の学びの実態を図れていない（村田 2003 p. 99）という批判である。つまり、展示評価を前提として行う事前・事後調査では、展示そのものへのフィードバックを求めるがあまり、来館者の博物館における学びの実態を把握するものとなっていないという批判である。確かに、ハイン（Hein 1998）も指摘するように、博物館における学びは複雑なプロセスを経るものだと考えられる。したがって、学びの実態を実証的に捉えることは難しい課題である。上に挙げた琵琶湖博物館の事例は、展示へのフィードバックを重視し、特にキーワードの使用有無に着目しているため、来館者の学びの実態を十分に捉えた調査とは言いにくい面がある。しかしながら、事前・事後調査は、来館者が博物館訪問前と後で、同じ質問にどのように答えているのか、反応の違いを捉えることができるという強みがある。そして、反応の違いは一人一人の学びの実態を反映していると考えられる。つまり、事前・事後調査で集められるデータは、「展示の効果を測る」という尺度のみならず、来館者一人一人の学びの実態、博物館体験を理解するためのデータとしても見ることができる。ここでいう「博物館体験」とは、展示を通して受け止める内容だけでなく、空間的な雰囲気を感じたり、人とふれあったりなど、様々な体験を広く含めたものを指している（Falk and Dierking 1992）。事前・事後調査への批判を紹介している村田（2003）も、こうした意味での「博物館体験」に注目している。本稿で後に取り挙げる事前・事後調査は、来館者の「博物館体験」の一部を深く理解するための手法であるといえる。

博物館における学びを理解し、評価するために実施する事前・事後調査について、その調査手法を詳細に述べた文献は、管見によれば、日本語ではまだない。また、海外の文献を見ても、必ずしも教育的な見地からの評価方法として扱われていない（Hein 1998）。事前・事後調査の源流は、心理学研究にある。博物館における来館者研究が歴史的に、心理学研究の影響を強く受けたことは周知の通りである（村田 2003；Hein 1998）。メルトンとロビンソン（Melton and Robinson 1935）の来館者の行動に注目した研究が基礎を築いたといえる。行動主義に基づく手法は最近の研究にも採用されている。そして、来館者研究の際に用いる事前・事後調査の手法の問題点は、心理学で指摘されている点がそのまま該当する（Inoue 2005）。実験心理学では条件を人工的に調整し、できる限り被験者が同じ条件の下に査定を受けるように工夫する。例えば、同じ部屋で同じ教材を使い、教材を読む時間の長さを調整するなどである。しかしながら、このよ

うにある一定の条件を揃えた実験においても、一人一人の被験者の持つ固有の条件を同一にすることは不可能であり、これはあらゆる実験調査および教育評価の弱点であることが指摘されている (Scott and Usher 1999)。

この弱点は博物館における学びを評価する際にも当てはまる。博物館体験を通しての学びの成果だけを抽出するような調査は難しく、既存の手法では限界があるだろう。しかし、これは博物館における学びを理解し、評価しないでよいという意味では決してない。研究手法に限界があることを了承した上で、調査から何がわかるかを的確に論じ、それをたたき台にして新しい研究手法を今後生み出していくことが課題であると思われる。そこで、次節では歴史系博物館における学びを評価するための手法の一つとしての事前・事後調査の有効性をさらに詳しく検討するため、歴博における事前・事後調査を取り上げることにしたい。

6 歴博における事前・事後調査による学びの評価

筆者の勤務する国立歴史民俗博物館（略称：歴博）は1983年3月に千葉県佐倉市に開館した歴史系博物館である。歴博ホームページには次のような紹介文がある。

本館は日本の歴史と文化について総合的に研究・展示する我が国で唯一の国立の歴史博物館で、千葉県佐倉市にある佐倉城跡の一角、約13万平方メートルの敷地に延べ床面積約3万5千平方メートルの壮大な規模を有する歴史の殿堂です。

原始・古代から近代に至るまでの歴史と日本人の民俗世界をテーマに、実物資料に加えて精密な複製品や学問的に裏付けられた復元模型などを積極的に取り入れ日本の歴史と文化についてだれもが容易に理解を深められるよう展示されています。

(引用：「館長挨拶」<http://www.rekihakuac.jp/about/index.html>、2005年7月1日最終アクセス)

上記の引用では、歴博は日本の歴史と文化について「だれもが容易に理解を深められるよう展示されています」とある。しかし、実際には、「だれもが容易に理解」できるような展示にはなっていない。歴博の展示は対象者層を「ある程度の予備知識を持つ学生・社会人」としてきた（国立歴史民俗博物館 1991 p. 289）。もう少し具体的には、「高校で日本史を学んだ人」（国立歴史民俗博物館 2002 p. 11）と設定されてきた。展示の内容は非常に高度で、その解説も難しい。特に、年間来館者数の4分の1強を占める学校団体の小中学生（約4万人）にとって、展示の解説は難しいものであった。

このような現状を踏まえ、歴博では1998年5月に「歴博の博物館活動と学校教育との関係を考え、試行する」ワーキンググループが発足した（国立歴史民俗博物館 2002 p. 3）。中間報告書では、次のような指摘がされている。すなわち「実際に歴博を利用する子どもたちに対して、どのように博物館としての責任を果たすべきかについて考えなければならない」という指摘と、「一般に、美術館・自然史系博物館・子ども博物館に比べると、歴史系博物館での実践的な研究・相互批判（議論）はきわめて遅れており、歴史系博物館の学芸員にとって、こうした実践的な研究を体系的・組織的に進めることが必要とされていると考える」という指摘である（p. 3）。こうした指摘を

踏まえ、1998年以降、歴博は次のような具体的な取り組みを行っている。

- 来館する学校への対応（常設展示への解説、歴博についての説明、質問への対応など）
- 歴博協力校の募集と実践（実践協力校小・中・高校・養護学校との連携）
- 「先生のための歴博講座」の実施
- 親子クイズの実施
- 教育関係のブックレットづくりの研究会開催

上記の活動は全て2006年2月現在まで継続して実施されている。さらに、上記の取り組みに加えて、歴博では観客（来館者）調査を実施してきている。その成果の一部は宮田・竹内・安達（2003）「展示改善にむけた観客調査の設計と実施」や竹内（2004）「展示室における観客の観覧行動と記憶および理解に関する研究」などで公表されている。

本稿では歴博協力校を対象に2005年6月に実施した歴博訪問の事前・事後調査について分析することで、歴史系博物館における子どもの学びを評価するまでの事前・事後調査の有効性を具体的に明らかにしたい。歴博における事前・事後調査の取り組みはまだ始まったばかりではあるが、その成果の一部を検討することで、他の博物館や博物館における学習活動のあり方の改善にも貢献できるものと考えられる。

歴博協力校とは、正式名称を実践学習協力校と言い、1999年に初めて誕生したものである（国立歴史民俗博物館 2002）。歴博協力校制度の狙いは、「学校が授業で歴史系博物館を利用する場合の問題点について具体的に検討する」というものである（国立歴史民俗博物館 2002 p. 8）。具体的には、下記の事項について調査を行っている。

- ・ 学校が実際に歴史系博物館を有効に使うためには、学校・博物館双方にとってあらかじめどのような準備が必要か。
- ・ 実際にどのような授業案をつくることができるか。
- ・ この実践授業で生徒はどのように変わったか（どのような効果があったか）
- ・ どのような問題点があったか（改善するならば何が必要か）
- ・ とくに展示の上でどのような点が問題があるか（どのように展示を改善すれば学校教育で有効に使えるか）

初年度は実際に歴博を訪問できる地域の小中学校を中心に募集し、9校が決まった。まずは2年間、協力してもらうことで合意した。現在はこの制度が拡張され、小・中・高校・養護学校、合計22校（2005年7月現在）にご協力いただいている。協力校には、最低年1回は歴博（歴博の展示）を使った授業を実施し、授業案・授業記録・児童生徒の感想をまとめて歴博に提供してもらっている。また、歴博側は協力校と検討会をもち、計画を立てる段階から協力し、教員の下見の際は入館料を無料にし、実際の訪問の時も先生・児童生徒の入館料を免除するという特典を設けている。

本稿で取り上げる調査結果は、2005年6月7日～9日にかけて来館した茨城県の公立小学校6年生、計87名から回収した事前・事後アンケート調査の結果である。以下、本事前・事後アンケ

ート調査の概要と結果については、国立歴史民俗博物館『れきはくにいこうよ：博物館研究プロジェクト活動報告 2004-2005』(2006年発行予定)をもとに述べる。アンケート調査票は歴博が作成し、原本を一部ずつ学校の教諭に郵送した（事前に教諭が来館された場合は手渡した）。調査票はA4サイズで、両面印刷で1枚に収まるものである。学校側で人数分印刷してもらい、博物館訪問前に事前アンケートを実施し、訪問後1週間以内を目安に事後アンケートを実施してもらった。事前・事後アンケートが揃ったところで、学校の教諭に歴博まで郵送してもらった。今回の調査では事前アンケートが86名分、事後アンケートが87名分回収された。同じ回答者の事前・事後アンケートをそろえて比較考察するため、有効回答数は83名となった。

児童のプライバシーを保護するため、両調査票とも無記名式で実施した。しかし、事前・事後アンケートの場合、同じ回答者のデータを比較することに大きな意義があるため、回収された調査票の回答者を識別する必要がある。そのため、今回は先行研究で採用された手法を参考にし（Inoue 2005）、回答者のIDデータとして学校名、学年、クラス、生年月日と性別を用いた。同じ生年月日・性別の場合は、筆跡を比較し一致させた。今回の学校の場合、実名を記入した児童はおらず、プライバシーは概ね守られたといえる。なお、事後アンケートの回答数が1名増えたのは、事前アンケートを実施した日に欠席した児童が回答したためと考えられる。3名の回答が有効回答とならなかったのは、生年月日の記入漏れなどのために、事前・事後アンケートの回答者を一致させ難かったことによる。今後、同様の手法を用いた結果、有効回答数が十分に得られないケースが出た場合は、調査手法を再検討する必要があるだろう。今回は97%の児童から有効回答を得られており、事前・事後の回答者の一致した有効回答率に問題はないといえる。

では、事前・事後アンケートの質問項目を見てみよう。質問項目は、既に述べた通り、子どもが「歴史系博物館をどのように捉え、理解したのか」（博物館像・博物館へのイメージ）、「歴史系博物館で学ぶことへの意欲」、「歴史学習への興味・関心」という三点について、博物館の訪問前と後で比較できるように設定した。具体的な質問項目は以下の通りである。なお、歴博では小学生用と中学生以上用の二種類の事前・事後アンケートを制作しており、言葉遣いやルビをふるなどの違いがあるが、本稿では小学生用を紹介する。

表1 歴博協力校用の事前・事後調査アンケート票

事前：「見学する前のれきはくアンケート」	回答・選択肢
Q1-1 歴博へ行くのは何回目ですか。	1はじめて 2前に行ったことがある 今度が（ ）回目
Q1-2（該当者のみ）だれと行きましたか。	1学校で 2家族と 3友達と 4その他
Q2 博物館や美術館へ行くのは好きですか。	1とても好き 2どちらかといえば好き 3どちらかといえばきらい 4きらい
Q3 博物館ってどんなところだと思いますか。	() ところ
Q4-1 歴史の勉強は好きですか。	1とても好き 2どちらかといえば好き 3どちらかといえばきらい 4きらい
Q4-2 それはなぜですか。	自由記述
Q5 いつもどこで歴史の勉強をしますか。	1学校 2図書館 3博物館 4自分の家 5その他（どこ？ ）
Q6 私は歴博に行ったら（ ）たいです。	（左記カッコ内に自由記述）
Q7 歴博に行ったら何を見学したいですか。	自由記述

事後：「見学のあととのれきはくアンケート」	回答・選択肢
Q1 博物館ってどんなところだと思いましたか。	() ところ
Q2 歴博で特に注意して見たものや調べたことはありますか。	自由記述
Q3-1 歴博でいちばん気に入った展示物は何ですか。	自由記述
Q3-2 どんなところが気に入りましたか。	自由記述
Q4 もっとよくしてほしいところがあつたら教えてください。	自由記述
Q5 歴博へ行くことをお友達やお家の人にすすめますか。	1すすめる 2どちらかといえばすすめる 3どちらかといえばすめない 4すすめない
Q6 お友だちやお家の人に歴博がどんなところかおしえてあげるとしたら、どんなふうに言いますか。	自由記述
Q7 歴博に「また行きたい」と思いますか。	1行きたい 2どちらかといえば行きたい 3どちらかというと行きたくない 4行きたくない
Q8 私は、次に歴博に行ったら（ ）たいです。	括弧内に自由記述
Q9 日本の歴史についてもっと知りたいと思いますか。	1とてもそう思う 2そう思う 3そう思わない 4まったくそう思わない

本節では以下、それぞれの質問の狙いと結果を簡潔に述べていきたい。ただし、紙幅の都合上、全ての質問項目を取り上げることはできないため、博物館での学びを評価する上で特に重要な質

問項目に限って分析することにしたい。

まず、事前アンケートの質問 Q1-1 「歴博に行くのは何回目ですか」と質問 Q1-2 「(該当者のみ)だれと行きましたか」への回答から見ていこう。

Q1-1 に対し、86%の子どもが「はじめて」と回答し、続いて2回目が9%、3回目が1%、回答なしも3%であった。ほとんどの子どもにとり、今回の歴博訪問がはじめての体験であることが判明した。その理由としては、児童は普段、茨城県に住んでおり、千葉の佐倉市にはなかなか来られないことが考えられる。この事情は他の質問項目の回答を解釈する際にも、常に頭に入れておく必要がある。つまり、既に何度も訪問したことのある子どもが調査対象となる場合には、今回の調査結果とは異なる傾向が現れることが予測される。今回の調査で既に訪問したことがある子どもに向けた質問 Q1-2 「だれと行きましたか」に対して、92%は「家族と」回答し、残り8%は「学校で」答えた。既に訪問したことがある場合は、大抵家族と一緒に訪問していることがわかる。

次に、事前アンケートの質問 Q2 「博物館や美術館へ行くのは好きですか」への回答を見てみよう。

Q2 は博物館や美術館への関心を聞く質問である。今回は子どもの態度を明確に把握するために、選択肢を「とても好き」「どちらかといえば好き」「どちらかといえばきらい」「きらい」とした。つまり、「どちらともいえない」もしくは「わからない」という選択肢は設けなかった。このような手法はアンケート調査の手法の一つとして認められている（内田・醍醐 2001）。質問の結果、40%の子どもが「とても好き」、57%が「どちらかといえば好き」、残りの3%が「どちらかといえばきらい」と回答した。圧倒多数の97%の子どもが博物館・美術館に行くことをポジティブに捉えていることがわかった。3%の「どちらかといえばきらい」と回答した子どもについて調べてみると、全員、歴博を訪問するのは初めてであることが分かった。したがって、少なくとも、以前の歴博訪問がネガティブな反応を起こしたというわけではないことが分かった。なぜ博物館や美術館に行くのが好きなのか、その理由を聞くことによって、子どもの博物館・美術館への理解をさらに深く捉えることができるだろう。

以上で取り上げた質問項目で、歴博訪問前の子どもについて大まかな背景的理解が得られたかと思われる。次に歴博へのイメージに関わる質問項目を見てみよう。

まず、事前アンケートの質問 Q3-1 「博物館ってどんなところだと思いますか。」と、事後アンケート質問 Q1 「博物館ってどんなところだと思いましたか」との回答を比較してみよう。

Q3-1 と Q1 はどちらも博物館へのイメージを問う問題である。回答は、「() ところ」という形で括弧内への自由記述を求めている。同様の回答形式はマーケティング調査でブランドや製品のイメージを調査する場合によく用いられている。本稿では、まず、子どもの回答に表れた述語（例：「見学する」「～がある」）に注目し、主なものをカテゴリーに分けて分類してみた。分類した上での回答数をまとめたものが表 2 である。一文に二つの述語が入っていた場合は、それぞれをカウントしたため、回答数の合計は回答人数よりも多くなっている。

表2 「博物館ってどんなところだと思いますか（思いましたか）」への回答－カテゴリー別

事前アンケートの回答		事後アンケートの回答 n=83	
1 (物・資料・展示品)～がある	48人(57%)	1 (物・資料・展示品)～がある	30人(35%)
2 ～が展示されている・飾ってある	19人(23%)	2 ～が展示されている・飾ってある	19人(23%)
3 見られる・見学する	10人(12%)	3 見られる・見学する	11人(13%)
4 ～がわかる	6人(7%)	4 勉強する・学ぶ	8人(10%)
5 勉強する	4人(5%)	5 楽しい	7人(8%)
6 勉強になる	3人(4%)	6 わかる	5人(6%)
7 觸ったりできる	2人(2%)	7 面白い	4人(5%)

表2を見ると、トップの3項目の順位は変化していないことがわかる。と同時に、過半数近くの子どもが見学前に抱いていた「たくさん物があるところ」というイメージが見学後に大きく減少していることもわかる。また、表2には表れていないが、事前アンケートでは「楽しい」「面白い」といった主観的側面を示す回答は一人にしか見られなかった。(回答数が一人であったカテゴリーは、煩瑣になるため、表2では省略してある。) 事後アンケートになると、「楽しい」「面白い」という回答が大幅に増加している。こうした変化から、子どもの博物館へのイメージが、「物がある」といった客観的な描写から、「楽しい」「面白い」といった主観的なイメージへと広がりを見せていることがわかる。具体例として、表3で三名の児童の回答の変化を挙げておこう。

表3 「博物館はどんなところだと思いますか（思いましたか）」への個別の回答－例1

見学前	見学後
(6年・女) 色々な道具がいっぱいありそう	→ 楽しい
(6年・女) 恐竜の化石が貼ってあり、迫力がある	→ 今まで行った所と違い、広くて静かで楽しい
(6年・男) いろいろな物が説明等がついて置いてある	→ 展示してあるものを見て、いろんな発見がある

さらには、表4で示すように、博物館へのイメージがより具体的で鮮明になった例もあった。

表4 「博物館はどんなところだと思いますか（思いましたか）」への個別の回答－例2

(6年・女)歴史について色々見ができる	→ 昔の土器や絵、模型が見れる
(6年・男)色々置いてある	→ 昔の道具、ポスターや家などがあつておもしろい
(6年・女)いろんな事がわかって、いろんなものが飾ってある	→ 色々な模型やレプリカ、本物などの色々なものがある

表4にあげた3人の事前アンケートへの回答はいずれも、「色々置いてある」「いろんなものが

飾ってある」といった具合に、具体的に何を指しているのか曖昧なものであった。しかし、見学後の回答は、実際に見た「昔の土器・道具・ポスター・模型」などを記述しており、博物館のイメージがより具体化していることが読み取れる。

以上のように、ほぼ同じ趣旨への設問への回答を、博物館の訪問前と後で比較することによって、子ども1人1人の博物館像が博物館体験によって変化していることがわかる。もちろん、特に変化を見せず、見学前に「昔の物がいっぱいある」と答え、見学後にも「いっぱい昔の物がある」と回答する例もあった。しかしながら、主観的な回答が増えたり、「色々な物」がどんなものなのかを具体的に明示できるようになったという所に、博物館での子どもの学びの成果を見て取ることができるだろう。

引き続き、事前アンケート質問Q5「いつもどこで歴史の勉強をしますか。」への回答を見てみよう。

Q5に対しては複数回答も認めた。学校が一番多い回答であることが予想されるが、この中にどの程度博物館が入ってくるかによって、子どもが博物館を学びの空間として捉えているかどうかを知ることができる。結果を図1に示しておこう。

予想された通り、学校が圧倒多数を占めている。学校と自分の家を両方上げる子どももいた。そして比較的少数ながら、図書館と博物館をあげた子どもが7%ずついた。博物館も図書館と同程度、学びの場所と認識されていることがわかる。

次に、事前アンケート質問Q6「私は歴博に行ったら（ ）たいです。」と、事後アンケート質問Q8「私は、次に歴博に行ったら（ ）たいです。」への回答を比較してみてみよう。

Q6もQ8も、歴博で何をしたいかを聞いている質問である。どちらも子どもが「歴博でできることは何か」を考えてもらうという狙いがある。また、回答から子どもの歴博へのイメージや、歴博をどんなことができる場所と理解しているのかを知ることができる。Q6、Q8への回答をカテゴリーに分けてまとめたものが表5である。

図1 事前アンケート質問 Q5「いつもどこで歴史の勉強をしますか」への回答 (n=83)

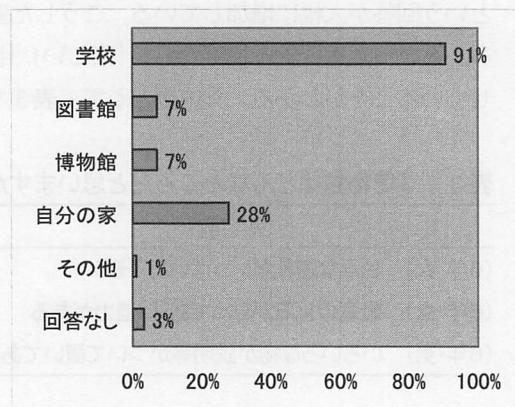


表5 「私は、(次に) 歴博に行ったら () したいです。」 (n=83)

	見学前		見学後
1 見学したい・見たい	60人(71%)	1 見学したい・見たい	60人(71%)
2 調べたい	11人(13%)	2 調べたい	17人(20%)
3 勉強したい(学びたい)	10人(12%)	3 知りたい・楽しみたい・歩き回りたい	
4 知りたい	3人(4%)	— したい・買いたい等	各1人(1%)

表5を見る限り、一回の博物館体験によっては、博物館へのイメージや博物館でできることへの理解はあまり広がらなかったようである。歴博訪問の前も後も、「土器とかをたくさん見たい」、「時間をかけてもっとよく見学したい」といった「見学したい・見たい」というカテゴリーの回答が大半である。つまり、視覚情報を得ることを目的とした回答が目立っている。二位の「調べたい」は訪問後に増加している。事前アンケートで多かった「勉強したい・学びたい」という回答が事後調査では姿を消している。この理由は今後の調査で調べる価値があるだろう。本稿では、仮に、以下のような仮説を提唱しておきたい。「勉強する」もしくは「学ぶ」という行為を、子どもはどちらかというと受身の行為として理解しているのではないだろうか。学校での受身の「勉強・学び」に比べて、博物館での「勉強・学び」は自分から動いて見てみたり、調べてみたりと、能動的な側面が強い。そのため、博物館体験をした後では、「勉強・学び」という言葉は博物館での「勉強・学び」に似つかわしくないものに思えてしまい、「見学する」、「見る」、「調べる」といった言葉を用いる傾向があるのだ、と。もちろん、以上の説明はあくまで仮説であり、今後の調査で検証される必要がある。

一回の博物館体験で得られるものは限られているとはいえ、博物館でできることの理解が広がっていない理由は考察に値する。筆者の考えでは、その理由の一つは、子どもが歴博で実際に体験したことが「見る」「調べる」という行為にほぼ限られていたからであろう。つまり、体験型の展示に触れてみる、楽器を奏でる、絵を描くなどの様々な活動を歴博でもっと体験していれば、「次に歴博に行ったら土器に触りたい」といったような反応が見られたことと予想できる。今回の訪問のように、見る・調べるといった活動が大部分であったような見学の場合、博物館でできることへの理解はあまり変化しないと言える。Q 6とQ 8への回答は、各学校の見学への準備の仕方や実際の見学の仕方によって違いが出てくると考えられるため、今後も継続して調査を行う必要がある。

Q 8への回答からはまた、歴博を再訪する際には、「ゆっくり見たい」「もっとじっくり見たい」「見てないものを見たい」といった希望を子どもたちが抱いていることが見て取れる。「ゆっくり・じっくり見たい」という趣旨の回答は18人、「見てないところを見たい」という趣旨の回答は13人もあった。

以上で取り上げた質問項目によって、子どもの歴博へのイメージをある程度明らかにすることことができたかと考えられる。そこで次に、歴博再訪問への意欲を問う質問項目と歴史学習への興味・関心を問う質問項目とをまとめて取り上げたい。まず、事後アンケート質問Q7「歴博に「また行きたい」と思いますか。」への回答を見てみよう。

図2にまとめたように、見学後に歴博に「行きたい」または「どちらかといふ行きたい」

と答えた子どもの合計は93%で、ほとんどの子どもが前向きな姿勢を示している。ただし、「どちらかといふ行きたくない」という子どもも5%いる。先に述べたように、見学前に「博物館・美術館に行くことはどちらかといえばきらい」と回答した子どもは3%であった。見学前に「博物館・美術館に行くことはどちらかといえばきらい」と回答し、見学後に歴博に「どちらかといふ行きたくない」と答えた子どもは1人だけであった、逆に言うと、見学前に博物館・美術館に行くことは「どちらかといえばきらい」と答えていても、博物館体験によって「また行きたい」と肯定的な態度を見せるようになる子どもも二人いたわけである。

博物館に対する肯定的な態度を確認するには、事後アンケートQ5「歴博へ行くことをお友達やお家の人にすすめますか」という質問への回答も参考になる。児童の49%が「すすめる」と回答し、44%が「どちらかといえばすすめる」、5%が「どちらかといえばすすめない」、2%が「すすめない」と回答している。やはり大多数の93%の児童が、歴博に行くことを友達や家族に薦めると回答していることから、博物館に対する肯定的な態度を見てとれる。

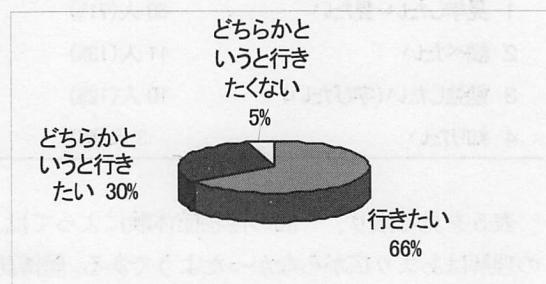
次に、事前アンケート質問Q4-1「歴史の勉強は好きですか。」と、Q4-2「それはなぜですか。」の回答を見てみよう。

Q4-1は歴史学習への意欲・関心を尋ね、Q4-2ではその理由を聞いていている。Q4-1への回答は「とても好き」51%、「どちらかといえば好き」41%、「どちらかといえばきらい」8%であった。「好き」とポジティブに回答した子どもは92%にものぼる。この結果は、非常に前向きなものであるが、先生に配布されたアンケートに教室で回答するという環境を考慮すると、「先生が喜ぶ回答」を書いている子どもがいたことは否めない。10歳以上の子どもは社会性を意識し始め、周囲に失礼に当たる発言を控えるようになるという先行研究もある(Augoustinos and Roseware 2001)。ゆえに、もしこの調査が博物館や自宅などで実施された場合、違った結果となっていた可能性がある。

歴史の勉強が好きとした主な理由には、「昔のことがわかつて面白い」「人物とか何が起きたかなどの勉強が面白いからです」「昔のことを知りたいから」などがあった。

続いて、事後アンケート質問Q9「日本の歴史についてもっと知りたいと思いましたか。」に対

図2 事後アンケート質問 Q7 「歴博に「また行きたい」と思いますか。」の回答結果

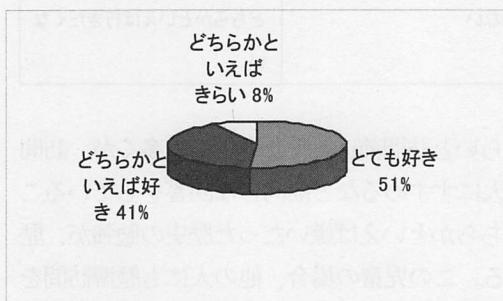


する回答を分析しよう。先に挙げた事前アンケート質問Q4-1「歴史の勉強は好きですか」に対する回答を、この事後アンケート質問Q9への回答と比較することで、歴博における体験が歴史学習への興味や関心を高めたかどうかを調べることができる。二つの質問項目それぞれへの回答をまとめたのが図3である。

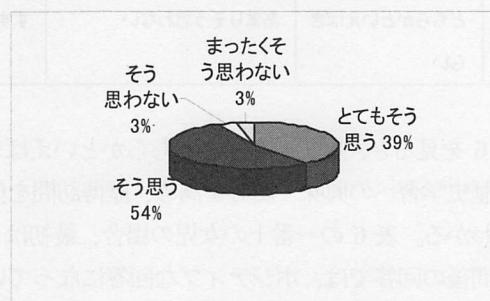
図3によると、92%もの子どもが、訪問前に、歴史の勉強をするのが好きだと回答している回答した。訪問後、日本の歴史をもっと知りたいかと回答した子どもも93%にのぼり、大多数の子が前向きに受け止めていることがわかる。しかしながら、訪問後、日本の歴史についてもっと知りたいと思わない子どもも6%にのぼっている。この6%の子どもは、なぜ歴史学習に対して否定的な態度を持っているのであろうか。その理由を解明することは本稿の枠を超える上、本事前・事後調査の結果からは明確なことはいえない。しかしながら、本稿では、関連する次の点を解明

図3 事前アンケート質問Q4-1と事後アンケート質問Q9の結果の比較

事前アンケート質問 Q4-1 「歴史の勉強は
てもっと知り好きですか」の回答結果



事後アンケート質問 Q9 「日本の歴史について
たいと思いますか」の回答結果



しておきたい。つまり、訪問前に歴史の勉強が「どちらかといえばきらい」と回答した子どもに着目し、博物館体験によってどのような変化が表れたのかを明らかにしておきたい。この点を表にして示したのが表6である。

表6 事前調査で歴史の勉強が「どちらかといえばきらい」と回答した児童の事後調査の回答

	歴博訪問の前	歴博訪問の後		
	歴史の勉強は好きですか。	日本の歴史についてもっと知りたいと思う	歴博へ行くことを他の友達や家の人にすすめますか	歴博に「また行きたい」と思いますか
6年女	どちらかといえばきらい	とてもそう思う	すすめる	行きたい
6年男	どちらかといえばきらい	そう思う	すすめる	行きたい
6年男	どちらかといえばきらい	そう思う	どちらかといえばすすめる	行きたい
6年男	どちらかといえばきらい	そう思う	どちらかといえばすすめる	どちらかといえば行きたい
6年女	どちらかといえばきらい	そう思う	どちらかといえばすすめる	どちらかといえば行きたい
6年男	どちらかといえばきらい	あまりそう思わない	すすめない	どちらかといえば行きたくない

表6を見ると、歴史の勉強がどちらかといえばきらいと訪問前に答えた子どもの多くが、訪問後に歴史学習への興味・関心を高め、歴博訪問を他人にすすめるなど前向きな回答をしていることがわかる。表6の一番上の女児の場合、最初はどちらかといえば嫌いだった歴史の勉強が、歴博訪問後の回答では、ポジティブな回答になっている。この児童の場合、他の人にも歴博訪問を薦めており、博物館体験が満足いくものであったことが伺える。対照的に、表6の一番下段の男児の場合、最初から歴史の勉強が嫌いで、その傾向は博物館体験後も継続している。歴博を他の人に薦めない、どちらかといえば歴博にもう一度行きたくないなど、否定的な反応が複数の回答項目に反映されている。この児童の場合、博物館体験によって歴博再訪問への意欲や、歴史学習への興味・関心が生まるという変化は見られなかった。非常に少数ではあるが、このようなケースも実際にあるということを博物館のスタッフおよび学校の教員は改めて認識する必要があるだろう。

そして最後に、事後調査の質問項目のうち、博物館や博物館における学びの活動を改善していく上で特に重要な項目として、子どもたちが見学をした後に、博物館に対して改善を求めた声の内容を分析したい。事後アンケート質問Q7「もっとよくしてほしいところがあったらおしえてください」は、子どもたちに歴博をどのように改善して欲しいかを聞いている。子どもたちの要望は以下のカテゴリーに分けられた。

表7 事後アンケート質問Q7「もっとよくしてほしいところがあつたらおしえてください」への回答結果—カテゴリー別（特になし：9人、記入なし：18人）

- | | | |
|----------------|-----------|--------------------------------|
| 1 体験型の展示が欲しい | 22人 (27%) | 例「本当に触ったりあがれる所を作ってほしい」 |
| 2 展示資料を改善して欲しい | 9人 (11%) | 例「もっと昭和の物を増やしてほしい」 |
| 3 子供向けの解説が欲しい | 7人 (8%) | 例「黄色の分かりやすい説明をもっと色々な所においてください」 |
| その他 | 9人 (11%) | 例「展示物についてもっとよく分かるようにする」 |
-

表7で示されているように、一番多かった改善への要望は、体験型のハンドズオン展示を増やすことであった。体験型のハンドズオン展示は、主として自然科学系の博物館・科学館に設置されてきた。しかしながら、近年、歴史系博物館を含め、その他の博物館においてもハンドズオン展示を設置する傾向が見られる。例えば、1999年に開館した東北歴史博物館は「こども歴史館」を設置し、見るだけでなく、聞く、触れる、作るといった体験のできるコーナーを設けている。また、歴博でも中世の「びんざさら」（民俗芸能の打楽器）や近世の「覗きカラクリ」といった体験型の展示が導入されている。しかしながら、今回の事後調査の結果から、子どもにとって歴博の体験型のハンドズオン展示はまだ量が十分なものではなく、子どもたちのニーズに十分に応えているとはいえないことが明らかとなった。事後調査で出てきた「もう少し手でさわれるのを増やしたい」という声、「体験する所をもっと増やして欲しい」といった子どもの声は、子どもが歴博にも体験型のハンドズオン展示が少しはあることを理解しており、その上でさらなる充実を求めていることを示している。

続いて多かった要望は、展示資料の改善に関してである。3名の子どもが昭和のものをもっと増やして欲しいと述べており、「武士の生活や名前」を増やすようにという1名の子どもを除いて、他の特定の時代のものをふやして欲しいという要望はなかった。資料の数を増やすこと以外にも、「もっとテレビの数を増やして欲しい」、「模型を360度から見えるようにしてほしい」と具体的な声が上がっていた。

三番目に多かった要望は、子ども向けの展示解説をより充実させることであった。歴博では既に「子ども向け解説パネル」として黄色いパネルを常設展示の所々に設置している。そのことをふまえて、「黄色いプレートを増やしたほうが良い」、「黄色いパネルをもっとくわしく書いてほしい」と、黄色のパネルに言及しつつ、その量的、質的充実を求める声が4人の子どもから発せられている。事後調査の結果から、子どもたちが黄色のパネルを実際に読んでいること、黄色のパネルが子どもにとって展示理解を深める手立てとなっており、パネルの充実を子どもが望んでいることがわかる。

表7で示されている調査結果は、博物館のリニューアルや事業の見直しをする際に、どこから改善すればいいのかを具体的に示すものになっている。と同時に、子どもが歴博で学ぶことに対してどのような意欲を持っているか、またどのような学習意欲を歴博訪問によって喚起されたの

かを質的に示すデータともなっている。表7で示されたような子どもの学習意欲にできる限り応えていく形で、展示や教育プログラムを改善していくことが望まれる。

7 歴博における学びの評価のまとめ

前節では、2005年6月に実施された歴博での事前・事後調査の結果について、子どもの学びの評価に焦点を絞った分析を行ってきた。本節ではその分析結果をまとめておきたい。本稿は次の三点に着目して、学びの評価を行ってきた。すなわち、①「歴史系博物館をどのように捉え、理解したのか」（博物館像・博物館へのイメージ）、②「歴史系博物館で学ぶことへの意欲」、③「歴史学習への興味・関心」の点である。以上の三点に対応させて、調査結果をまとめておこう。

①歴史系博物館をどのように捉え・理解したのか

- 博物館体験を通して、「色々な物があるところ」「色々なものが展示されているところ」という表面的な博物館理解にとどまらず、「面白いところ」「楽しいところ」といった主観的な側面を含んだイメージを抱くようになった。
- 子どもは、実際に博物館で体験したことを「博物館でやること」と捉える傾向がある。つまり、今回の訪問で「見ること」「調べること」に取り組んでいた子どもは、「触ること」「作ること」といった他のアプローチを希望したりはせず、次回の訪問時もまた「もっとよく見たかった」「いろいろ調べたい」と述べている。

②歴史系博物館で学ぶことへの意欲

- 90%以上の子どもは歴博への再訪を希望している。さらに、「歴博への訪問を友達やうちの人におすすめますか」という質問への回答でも90%以上の子どもが「すすめる」と回答している。つまり、大多数の子どもたちは歴博での博物館体験を肯定的に受け取り、また行って、調べたり、じっくり見て回りたいと考えている。
- 歴博訪問後、歴博に対する要望として、27%の子どもが体験型のハンズオン展示が増えることを挙げ、11%の子どもが展示資料の改善を求め、8%の子どもが子ども用の解説パネルの充実を望んでいる。こうした子どもからの具体的な要望は、子どもがどのような学習意欲を持っており、また歴博訪問によってどのような学習意欲が喚起されたのかを示している。

③歴史学習への興味・関心

- 90%以上の子どもは、歴史の学習が好きで、歴博訪問後にも日本の歴史をもっと知りたいと考えている。訪問前に歴史の学習が嫌いだと回答していた児童の多くも、博物館体験を通して、歴博への興味・関心を高め、自分でも歴博に再訪したいし、他の人にも薦めたいと回答するといった肯定的な変化を見せた。

以上が歴博での子どもの学びの評価のまとめである。以上にまとめた調査結果は、事前・事後調査という手法が、歴史系博物館における子どもの学びを評価する上で一定程度有効であることを具体的に示している。

博物館における学びを評価する場合、しばしば問題となるのは、「訪問後の回答は博物館体験だ

けの結果とはいえないのではないか」という点である。博物館訪問の後に受けた学校の授業の影響かもしれない、もしくは、自宅で見たテレビ番組や読んだ本の影響かもしれない。この問題は博物館での学びの評価のみならず、あらゆる教育評価および学習評価に共通する問題であり、簡単な解決方法はないように見える (Hein 1998)。しかしながら、本稿で実証したように、事前・事後調査を行うことによって、一人一人の回答を詳しく分析し、子どもが博物館体験を通して感じたことや学んだことを、部分的ではあっても捉えることは十分可能である。展示評価のためのみならず、博物館における学びを評価するためにも、事前・事後調査は有効であるといえよう。

8 今後の展望

本稿では、歴博で2005年6月に実施された歴博協力校を対象とした事前・事後調査を具体例として、子どもの学びの評価をするまでの事前・事後調査の有効性を具体的に検討してきた。歴博での事前・事後調査はまだ始まったばかりであり、今後、質問紙の質問項目や実施手法などが改定されていく可能性を残している。今後、事前・事後調査の研究手法をさらに磨き、データ分析を積み重ねることで、歴史系博物館における子どもの学びをより深く理解することが可能になると考えられる。事前・事後調査を実施すること自体は、組織的な体制、人員、予算が確保されれば多くの博物館で導入できるであろう。

本稿で取り上げた歴博での事前・事後調査の第一の目的は、展示や教育プログラムの改善に役立てることではなく、子どもの学びを評価することであった。しかしながら、歴博の事前・事後調査で明らかになった知見は、以下に述べるような形で、歴博および他の歴史系博物館や、その他の博物館における展示や教育プログラムの改善に役立たせることができるだろう。

第一に、本稿では、歴博での事前・事後調査に基づいて、子どもたちが博物館訪問時に「見る」「調べる」という旧来通りの使い方を体験すると、次に博物館を訪問する時も同じ使い方を求める（同じ使い方しか知らないままでいる）傾向があることを明らかにした。もし、歴史系博物館において「見る」「調べる」しかできないのならば、学校の図書室やコンピュータ室での学習とそう変わらないと言えるのではないだろうか。学校内で実現できる学習活動しかできないのならば、わざわざ博物館を訪問する必要はないと受け止められてしまうだろう。この結果は、今後の歴史系博物館における学習活動の改善の一つの方向性を示唆しているように見える。それは、歴史系博物館にしかできない学びとは何であるのかを追求し、それを教育プログラムという形で提供していくことである。例えば、歴史にかかわる事物を単に眺めるのではなく、どこに目をつけて観察すると、どのような情報が分かるのかを学ぶという教育プログラムが考えられる。博物館における学びの一つの可能性は、来館者が学芸員や研究者の視点に立って実物・資料を理解するプロセスを体験することであろう。小島が指摘している通り、「本物の歴史を訪ねる上で有用な知識を得ることができる」し、また歴史を「探求していくための方法を身につけるトレーニングセンターとしても役に立つ」(小島 2006 p. 13) ことができるだろう。そして、可能ならば実物に触れ、学芸員や教育員（エデュケーター）との対話を通して、実物・資料から獲得した情報を言語化し、書き留めるといった体験を提供するプログラムの開発といった改善策を考え

られる。

第二に、本稿では、歴博での事後調査の結果から、歴博を訪問した子どもの間で、子ども向けにわかりやすい言葉で書かれた解説パネルを量的、質的に充実させて欲しいという要望があることを明らかにした。歴博では常設展示の一部に子ども向けの黄色の解説を設置しているが、同様の試みは他の歴史系博物館でも、また歴史系以外の博物館でも行うことができるだろう。また、歴博のように子ども向け解説パネルを一部に取り入れている場合も、さらに量的、質的に充実させてほしいという需要があるかどうかを見極めたり、すでにある解説パネルの説明が適切かどうかを見定め、改善する上で、事後評価を役立てることができるだろう。

第三に、歴博での事後調査から、歴博を訪問した子どもたちの間で、体験型のハンズオン展示を充実させて欲しいという要望が強いことを明らかにした。また、事後調査によって、「もっと昭和の物を増やしてほしい」、「模型を 360 度から見えるようにしてほしい」といった具体的な要望を把握できることを示した。歴博のみならず、他の博物館においても、事後調査で子どもの要望を尋ねることによって、展示や教育プログラムの改善のための具体的な要望と、その強さを測ることができるだろう。

第四に、前節でまとめた歴博での事前・事後調査結果は、歴博を訪問した小学校 6 年生の子どもたちの場合、博物館体験から生まれた博物館像はおおむねプラスのイメージとなっており、博物館体験が学習意欲を（わずかであれ）高め、博物館を再訪する動機付けとなっていることを示唆している。しかしながら、今回の調査対象以外の学校団体の子ども、とりわけ中学校や高等学校の生徒など、異なる年齢集団の子どもが歴博に訪問した場合に、同様の調査結果が得られるかどうかは不明である。中学校や高等学校の生徒の場合、小学生のように 90% の子どもが歴史の学習が好きだとは考えにくい。もし、事前・事後調査の結果、博物館体験が「わからなかった」「つまらなかった」といったネガティブなものであることが示された場合には、調査結果を踏まえて展示や教育プログラムを改善していくことが必要になるだろう。

第五に、歴博での事前・事後調査から、子どもたちは色々なものを見たいと思っているものの、時間が足りず、歴博訪問後も再訪してもっとゆっくり・じっくり見て回りたいと考えていることを明らかにした。こうした子どもの状況をしっかりと認識することで、博物館側は学校団体の受入を工夫し、再度の博物館訪問とその際における子どもの学びを促進する仕掛けをつくり出していくことができるだろう。歴博のような広大な博物館の場合、大人の足でも一日ではとても全てを見切れない。そのため、時間の限られた学校団体利用の際は、展示室の回り方や見学の仕方を歴博側から教員に提案するなどの工夫が望まれる。例えば、引率の教員と子どもたちに最初に一時間ほどかけて軽く全ての展示室を回ってもらった後、展示室を一つか二つ選んでもらい、じっくり見学してもらったり、あるテーマを設定して、そのテーマに沿った展示を見てもらったりすることが考えられる。また、一回の歴博訪問で見たり体験したりした展示をそれぞれの子どもが記録する仕組みをつくって、再度の歴博訪問の前や最中に振り返ってもらう仕組みをつくることも考えられる。さらには、館蔵資料データベースを整備して、インターネットでアクセスできる

ようにしたり、紙媒体の教材や解説資料を整備して、何回かに分けて歴博を訪問する計画を立てやすくするなどの工夫も考えられる。以上に挙げた工夫は、歴博のみならず、他の博物館にも参考になるところがあるだろう。

以上、子どもの学びの評価を主たる目的とした歴博での事前・事後調査の結果に基づいて、展示や教育プログラムの改善への示唆を述べた。ただし、歴博の事前・事後調査のように、質問紙によるアンケート調査から得られるデータには、一定の限界があることも確かである。例えば、子どもがどれほど真剣にアンケートに回答したのかは分からないし、また、回答内容をさらに突っ込んで聞くこともできない。ここでいう回答内容を突っ込んで聞くとは、例えば、「博物館は迫力があるところ」と回答した子どもに対して、「迫力」とは何をさしているのかを聞くといったことを指す。さらには、本稿の調査のように先生のいる教室で回答する場合、先生のいる教室という環境が回答へ何らかの影響を及ぼすことも十分考えられる。

歴史系博物館における子どもの学びの実態をさらに詳しく捉えるためには、博物館のスタッフが協力校に赴き、博物館を訪問する前に子どもがどのような授業を受けているのかを調べたり、訪問中の行動を観察したり、訪問後に学校で行われる授業を観察し、子どもと先生の対話を記録するなどのアプローチが考えられる。一場（1999）が行っているように、子ども同士のやりとりや、子どもと先生とのやりとりを細かく分析していくことで、博物館で体験したことについての子どもの本音をより深く捉えることができるだろう。子どもの中には、自分の気持ちや考えを質問紙に言葉で書いて表すことが苦手なものも多い。そうした子どもの意見を汲み取る工夫をこらしていく必要がある。最近の研究では、ドローイング（Drawing:お絵かき）を活用した例などもある（Studart 2000; Moussouri 1999; Inoue 2002 2005）。ドローイングを用いることで、言語化されていないレベルでの子どもの理解を捉えることが可能となる。本稿で用いたような質問紙調査に加えて、以上で簡単に述べたような複数のアプローチを組み合わせることで、歴史系博物館における子どもの学びの実態をより深く理解できることだろう。今後のさらなる調査研究が望まれる。

[参考文献]

- Augoustinos M. and Rosewarne D. L. 2001 "Stereotype knowledge and prejudice in children" *British Journal of Developmental Psychology* 19, pp.143-156.
- ボーラン、M. (Borun, M.) 2000 「Visitor Evaluation: Asking the right questions」 琵琶湖博物館研究調査報告 第17巻 pp. 84-88.
- Falk J. H. and Dierking L. D. 1992 'The Museum Experience' Whalesback Books
- Hein G. E. 1998 'Learning in the Museum' Routledge
- Hooper-Greenhill E. 1999 'The Educational Role of the Museum' Routledge
- 一場郁夫 1999 『歴史発見！歴博活用のアイディア』歴史民俗博物館振興会
- Inoue Y. 2002 "Evaluation of cultural understanding through a museum exhibition: How do

-
- children 'discover' Japan?" *Journal of Education in Museums* 23, pp.12-16.
- Inoue Y. 2005 'Museum education and international understanding: representation of Japan at the British Museum' Unpublished PhD dissertation, Institute of Education, University of London.
- 小島道裕 2006 「参加する博物館ー内外の博物館教育からー」歴史地理教育 No. 696 pp. 8-13.
- 国立教育政策研究所 2004 『学習評価の工夫改善に関する調査研究』 国立教育政策研究所
- 国立歴史民俗博物館 1991 『国立歴史民俗博物館十年史』 国立歴史民俗博物館
- 国立歴史民俗博物館 2002 『れきはくにいこうよ：教育プロジェクト活動報告』 国立歴史民俗博物館
- 国立歴史民俗博物館 2006 『れきはくにいこうよ：博物館研究プロジェクト活動報告 2004-2005』 国立歴史民俗博物館（公刊準備中）
- 久留島浩 2002 「歴史系博物館と教室の間—いわゆる「博学連携」を実現するためにー」、じつきよう地理・公民科資料 第55号 pp. 6-11.
- Melton A. W. and Robinson, E. S. 1935 'Problems of Installation in Museums of Art' 14, American Association of Museums.
- 宮田公佳・竹内有理・安達文夫 2003 「展示改善にむけた観客調査の設計と実施：見学順路と滞在時間から見た観覧行動の解析」 国立歴史民俗博物館研究報告 第108集 pp. 321-347.
- 文部科学省 2002 『小学校学習指導要領』 文部科学省
- Moussouri T. 1997 "The use of children's drawings as an evaluation tool in the museum" *Museological Review* 4, pp.40-50.
- 村田麻里子 2003 「来館者研究の系譜とその課題—日本における博物館コミュニケーションの展開のための一考察—」 日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要 第7号 pp.95-104.
- 並木美砂子 2005 『動物園における親子コミュニケーション：チンパンジー展示利用体験の比較』、風間書房
- 佐々木秀彦・村井良子 2000 「講演：お客様の顔を知ることから始まった展示評価と改善」 琵琶湖博物館研究調査報告 第17巻 pp. 89-99.
- Scott, D. and Usher, R. 1999 'Researching Education: Data, Methods and Theory in Educational Enquiry' Cassell.
- Studart D. C. 2000 'The perceptions and behaviour of children and their families in child-oriented museum exhibitions', Unpublished PhD dissertation, University College London, University of London.

竹内 有理 2004 「展示室における観客の観覧行動と記憶および理解に関する研究—近世展示の展示評価結果から」 国立歴史民俗博物館研究報告 第109集 pp. 339–358.

内田治・醍醐朝美 2001 『実践アンケート調査入門』 日本経済新聞社

註1 本調査結果の全容は『れきはくにいこうよ：博物館研究プロジェクト活動報告 2004–2005』（国立歴史民俗博物館、2006年発行予定）に掲載予定である。